

泉鏡花作品集

第四卷



泉鏡花作品集

第四卷

創元社

泉鏡花作品集 第四卷

著者

泉鏡花

發行者

東京都中央区日本橋小舟町二ノ四
小林茂

印刷者

東京都文京區春日町三ノ四
猪瀬英一

發行所

東京都中央区日本橋小舟町二ノ四
(大阪)市北區橋上町四五
株式會社 創元社

定價 二〇〇圓
地方定價 二〇五圓

昭和二十七年五月三十一日 初版發行
昭和二十七年十二月五日 再版發行

電話茅場町(66)二〇六四・四〇八三・一七三四
振替東京一五六五・大阪五七〇九九

目次

女・客・・・・・・・・・・二

春畫・・・・・・・・・・三

春畫後刻・・・・・・・・・・四

白羽箭・・・・・・・・・・五

國貞ゑがく・・・・・・・・・・三

歌行燈・・・・・・・・・・五

解説・・・・久保田万太郎

短篇集
(三)

女客

一

「謹さん、お手紙、」

と階子段から聲を掛けて、二階の六疊へ上り切らず、欄干に白やかな手をかけて、顔を斜に覗きながら、背後向きに机に寄つた當家の主人に、一枚を齎らした。

「憚り、」

と身を横に、蔽うた燈を離れたので、玉ぼやを透かした薄あかりに、くつきり描き出された、上り口の半身は、雲の絶間の青柳見るやう、髪も容もすつきりした中年増。これはあるじの國許から、五ツになる男の兒を伴うて、此度上京、しばらく爰に逗留して居る、お民といつて縁續

き、一蒔繪師の女房である。

階下で添乳をして居たらしい、色はくすんだが艶のある、藍と紺、縦縞の南部の袷、黒絹子の襟のなり、ふつくりした乳房の線、幅細く寛いで、晝夜帯の暗いの、緩く纏うた、縮緬の扱帯に蒼味のかゝつたは、月の影のさしたやう。

燈火に對して、瞳清しう、鼻筋がすつと通り、口許の緊つた、瘦せぎすな、眉のきりゝとした風采に、しどけない態度も目に立たず、繕はぬのが美しい。

「これは憚り、お使い柄恐入ります。」

と主人は此方に手を伸ばすと、見得もなく、婦人は胸を、はらんばひに成るまでに、づつと出して差置くのを、疊をずらして受取つて、火鉢の上で一寸見たが、端書のは直ぐに済んだ。

机の上へ差置いて、

「眞個に御苦勞様でした。」

「はい、これはまあ、御丁寧な、御挨拶痛み入りますこと。お勝手から此方まで、随分遠方でごさんすからねえ。」

「憚り様ね。」

「些とも憚り様なことはありません。謹さん、」

「何ね。」

「貴下、其の（憚り様ね）を、端書を讀む、つなぎに言つてゐるのね、ほゝゝゝ。」

「謹さんも莞爾して、」

「お話しなさい。」

「難有う、」

「さあ、此方へ。」

「はい、誠に何うも難有う存じます、いゝえ、何うぞもう、何うぞ、もう。」

「早速だ、おや／＼。」

「大分丁寧でございませう。」

「そんな皮肉を言はないで、坊やは？」

「寢ました。」

「母は？」

「行火で、」と云つて、脈を曲げた、雪なす二の腕、擔いだやうに寢て見せる。

「貴女にあまえて居るんでせう。どうして、元氣な人ですからね、今時行火をしたり、宵の内から轉寢をするやうな人ぢやないの。鐵は居ませんか。」

「女中さんは買物に、お汗の實を仕入れるのですつて。」

それから私がお道樂、翌日は田舎料理を達引かうと思つて、次手に其分も。」

「おや階下は寂しいや、お話しなさい。」

お民は其まゝ、すらりと敷居へ、後手を弱腰に、引つかけの端をぎうと撫で、軽く衣紋を合はせながら、後姿の襟清く、振返つて入つたあと、欄干の前なる障子を閉めた。

「此處が開いて居ちや寒いでせう。」

「何だかぞく／＼するやうね、悪い陽氣だ。」

と火鉢を前へ。

「開ッ放して置くからさ。」

「でもお民さん、貴女が居るのに、其處を閉めて置くのは氣になります。」

時に燈に近う來た。險に颯と薄紅。

二

坐ると炭取を引寄せて、火箸を取つて俯向いたが、

「お禮に繼いで上げませうね。」

「どうぞ、願ひます。」

「まあ、人様のものので、義理をするんだよ、こんな吞氣ッちやありやしない。串戲はよして、謹さん、東京は炭が高いですつてね。」

主人は大胡坐で、落着澄まし、

「吝なことをお言ひなさんな、お民さん、阿母は行火だと言ふのに、押人には葛籠へ入つて、未だ蚊張があるといふ騒ぎだ。」

「何のそれが騒ぎなことがあるもんですか。又いつかのやうに、夏中蚊張が無くつては、それこそお家は騒動ですよ。」

「騒動どころか没落だ。いや、弱りましたぜ、一夏は。」

何しろ、家の焼けた年でせう。あの焼あつたと云ふものは、何ういふわけだか、恐しく蚊が酷い。未だ其の騒ぎの無い内、當地で、本郷のね、春木町の裏長屋を借りて、夥間と自炊をしたことがありましたつけが、其の時も前の年火事があつたと云つて、何年にもない、大變な蚊でしたよ。けれども、それは何、少いもの同志だから、萌黄緞の鎧はなくても、夜一夜、戸外を歩行いて居たつて、それで事は済みました。

内ぢや、年よりを抱へて居ませう。夜が明けても、的はないのに、夜中一時二時までも、友達ともだちの許へ、苦い時の相談の手紙なんか書きながら、わきで寢返りをなさるから、阿母さん、蚊が居ますかつて聞くんです。

自分の手にや五ツ六ツたかつて居るのに。」

主人は火鉢にかざしながら、

「居ますかも知れないもんだ。」

あゝ、些と居るやうだの、と何でもないやうに、言はれるんだけれども、何故阿母には居るだらうと、口惜いくらゐでね。今に工面して遣るから可い、蚊の畜生覺えて居ると、無念骨髓はねでしたよ。未だそれよりか、毒蟲のぶん／＼矢を射るやうな烈い中に、疲れて、すや／＼、……傍に私の居るのが嬉しさうに、快よささうに眠られる時は、猶堪らなくつて泣きました。」

聞く方が歎息して、

「だつてねえ、よくそれで無事でしたね。」

顔見られたのが不思議なほどの、懐しさうな言であつた。

「まさか、蚊に喰殺されたといふ話もない。そんな事より、恐るべきは兵糧でしたな。」

「然うだつてねえ。今ぢや笑ひばなしになつたけれど。」

「餘り然うでもありません。しかしまあ、お庇様、どうにか蚊張もありますから。」

「ほんとに、どんなに辛かつたらう、謹さん、貴下と。」優しい顔。

「何、私より阿母ですよ。」

「伯母さんにも聞きました。伯母さんは又自分の身がかせになつて、貴下が肩が抜けないし、然うかといつて、修業中で、どう工面の成らうわけはないのに、一ツ賣り二ツ賣り、一日だてに、段々煙は細くなるし、最う二人が消える

ばかりだから、世間體さへ構はないなら、身體一ツもないものにして、貴下を自由にしてあげたい、と初中然う思つていらしたつてね。お互に今聞いても、身ぶるひが出るぢやありませんか。」

と顔を上げて目を合はせる、兩人の手は左右から、思はず火鉢を壓へたのである。

「私は又私で、何です、なまじ薄暮の生えた意氣地のない兄哥がついて居るから起つて、相應に何うにか遺線つて行かれるだらう、と思ふから、食物の足りぬ阿母を、世間でも黙つて見て居る。」層悻がないものと極つたら、たよる處も何にもない、六十を越した人を、まさか見殺しにはしないだらう。

やつ了はうかと、日に幾度考へたかね。

民さんも知つて居ませう、あの年は、城の濠で、大層投身者がありました。」

同一年の、あひやけは、姉さんのやうな領き方。

「あゝ。」

三

「確か六七人もあつたでせう。」

お民は聞いて、火鉢のふちに、算盤を弾くやうに、指を反らして、

「謹さん、もつとですよ。八月十日の新聞までに、八人だつたわ。」

と仰いで目を細うして言つた。幼い時から、記憶の鋭い婦人である。

「ぢや、九人になる處だつた。貴女の内へ遊びに行くと、何時も歸りが遅くなつて、日が暮れちや、あの濠端を通つたんですがね、石垣が蒼く光つて、眞黒な水の上から、むらむらと白い煙が、此方に這ひかゝつて来るやうに見えるぢやありませんか。」

引込まれては大變だと、早足に歩行き出すと、何だかりしろから追ひ駈けるやうだから、一心に遁げ出してさ、坂の上で振返ると、凄いやうな月で。

あゝ、春の末でした。

あとについて來たものは、自分の影法師ばかりなんです。自分の影を、死神と間違へるんだもの、御覽なさい、生きて居る瀬はなかつたんですよ。」

「心細いぢやありませんか、ねえ。」

と寂しさに打傾く、面に映つて、頸をかけ、黒絹子の襟に障子の影、薄ら蒼く見えるまで、戸外は月の冴えたる氣勢。カラ／＼と小刻に、女の通る下駄の音、屋敷町に響いたが、女中は未だ歸つて來ない。

「心細いのが通り越して、氣が變になつて居たんです。」

ぢや、そんな、氣味の悪い、物凄、死神のさそふやうな、厭な濠端を、何の、お民さん。通らずとも事だけれど、何故か又、故^{わざ}にも、其處を歩行いて、行過ぎて了つてから、未だ死^{わづ}なないで居るつて事を、自分で確めて見たくてならんのでしたよ。

危険千萬。

だつて、今だから話すんだけど、其の蚊張^{あしは}なしで、蚊が居るつていふ始末でせう。無いものは活計^{かち}の代^{しろ}といふ譯で。

内で熟^{じつ}として居たんぢや、たとひ曳くにしろ、車も曳けない理窟^{りく}ですから、何がなし、戸外へ出て、足駄^{あだ}穿^くきで駆け歩行^{あひ}くしただけれど、さて出ようとすると、氣になるから、上り框^{かま}へ腰をかけて、片足履物をぶら下げながら、母さん、お米は？つて聞くんです。」

「お米は？つてね、謹さん。」

と、お民はほろりとしたのである。あるじは敢て莞爾^{えんじ}やかに、

「恐^{おそ}しいもんだ、其の辭兩に何升どこは、此の節却つて覺えました。其頃は、眞個^{まこと}です、無い事は無いにしろ、幾許^{いくしよ}するか知らなかつた。

皆、親のお庇^{おび}だね。

其の阿母が、然うやつて、お米は？つて尋^{たず}ねると、晩ま

であるよ、とお言ひなさる。

翌^{あす}日のが無いと言はれるより、どんなに辛かつたか知れません。お民さん。」

と呼びかけて、固より答を待つにあらず。

「もう、其の度にね、私はね、腰かけた足も、足駄^{あだ}の上で、何だつて、恚^{いら}り脊^せが高いだらう、と土間へ、へた／＼と坐りたかつた。」

「まあ、貴下、大抵ぢやなかつたのねえ。」

フト其の時、火鉢のふちで指が觸れた。右の腕はつけ元まで、二人は、はつと熱かつたが、思はず言ひ合はせたかの如く、鐵瓶^{てつびん}に當つて見た。左の手は、ひやりとした。

「謹さん、沸^ふしませうかね。」と輕^{かろ}くいふ。

「すつかり忘れて居た、お庇^{おび}さまで火もよく起つたのに。」

「お湯があるか知ら。」

と引つ立てて、蓋を取つて、燈^{あかり}の方に傾けながら、

四

「それでもね、」

とあるじは若々しいものいひで、

「お民さんが來てから、何となく勝手が違つて、一寸他所

から歸つて來ても、何だか自分の内のやうぢやないんですよ。」

「あら、
とて清^{すい}しい目を睜^みり、鐵瓶の下に兩手を揃へて、眞直に當りながら、

「そんな事を言ふもんぢやありません。外へといつては、それこそ田舎の芝居一つ、めつたに見に出た事もないのに、はる／＼一人旅で逢ひに來たんぢやありませんか、酷いよ、謹さんは。」

と美しく打怨ずる。

「飛んだ事を、はゝゝ。」
とあるじも火に翳して、

「そんな氣でいつた、内らしくないではない、其の下宿屋らしくないと言つたんですよ。」

「ですからね、早くおもらひなさいまし、悪いことはひません。どんなに氣がついても、しんせつでも、女中ぢや推切つて、何かすることが出來ませんからね、どうしても手が届かないがちになるんです。伯母さんも、もう今ぢや、蚊張よりお嫁が欲しいんですよ。」

あるじは、屹^いと頭^{かしら}を掉つた。

「否^い、よします。」

「何爲^なですね、謹さん。」と見上げた目に、敢て疑の色は

なく、別に心あつて映つたのであつた。

「何故といふと議論になります、唯ね、私は欲くないんです。」

恚^いういへば、理窟もつけよう。又どう恚^いうといふけれどね、年よりのためにも他人の交らない方が氣樂で可いかも知れません。お民さん、貴女が恚^いうやつて遊びに來て呉れたつて、知らない婦人^{おんな}が居ようより、阿母^{おやう}と私ばかりの方が、御馳走は届かないにした處で、水入らずで、氣が置けなくつて可いぢやありませんか。」

「だつて、謹さん、私が恚^いうして居たために、一生貴方、奥さんを持たないで居られますか。それも、五年と十年と、此のまゝで居たいたつて、此方に居られます身軀ぢやなし、最う二週間の上になつたつて、五日目ぐらゐから、やいやい歸れつて、言つて來て、三度めに來た手紙なんぞの様子ぢや、良人^{やど}の方の親類が、あゝの、恚^いうのつて、面倒だから、それにつけても早々歸れぢやありませんか。また貴下を置いて、他に私の身についた縁者といつてはないんですからね。どうせ歸れば近所近邊、一門一類が寄つて集つて。」

と婀娜^{あな}に唇の端を上げると、顰^{しり}めた眉を掠めて落ちた、髪^{かみ}の毛を、焦つたさうに、背^{うしろ}へ投^なげて搔^か上げつゝ、

「此の髪を拂^はりたくなるやうな思ひをさせられるに極つて

るけれど、東京へ来たたら、生意氣らしい、氣が大きくなつた上、二寸切られむつもりになつて、度胸を極めて、伯母さんには内證ですがね、これでも自分で呆れるほど、了簡が据つて居ますけれど、だつて然うは御厄介になつても居られせんもの。」

「何時までも居て下さいよ。最う、私は女房なんぞ持たうなり、貴女に遊んで居て貰ふ方が、どんなに可いか知れやしない。」

と我儘らしく熱心に言つた。

お民は言を途切らしつ、鐵瓶はやゝ音に出づる。

「謹さん、」

「えゝ、」

お民は唾をのみ、

「眞個ですか。」

「眞個ですとも、眞個ですよ。」

「眞個に、謹さん。」

「お民さんは、嘘だと思つて。」

「ぢやもう一層。」

と烈しく火箸を灰について、
「歸らないで置きませうか。」

五

我を忘れてお民は一氣に、思ひ切つていひかけた、言の下に、あはれ水ならぬ灰にさへ、かす書くよりも果敢げに、悄乎肩を落したが、急に寂しい笑顔を上げた。

「はゝゝはゝ、其の氣で澤山御馳走をして下さいまし。お茶ばかりぢや私は厭。」

といふうち涙さしぐみぬ。

「謹さん、」

といふも曇り聲に、

「も、貴下、どうして、そんなに、優くいつて下さるんですよ。慙うした私ぢやありませんか。」

「貴女でなくツて、お民さん、貴女は大恩人なんだもの。」

「えゝ？恩人ですつて、私が。」

「貴女が、」

「まあ！誰方のねえ？」

「私のですとも。」

「どうして、謹さん、私はこんなぞんざいだし、もう十七の年に、何にも知らないで兒持になつたんですもの。祿に小袖一つ仕立つて上げた事はなく、貴下が一生の大切だつた、其のお米のなかつた時も、煙草も買つてあげないでさ。」

後で聞いて口惜くつて、今でも怨んで居るけれど、内證の苦しい事つたら、些とも伯母さんは聞かして下さらない

し、あなたの御容子でも分りさうなものだつたのに、私が氣がつかないからでせうけれど、何時お目にかゝつても、元氣よく、いき／＼してねえ、眞個ですよ、今なんぞより、寢れてないで、もつと顔色も可かつたもの……」

「それです、それですよ、お民さん。其の顔色の可かつたのも、元氣よく活々として居たのだつて、貴女、貴女の傍に居る時の他に、然うした事を見た事はありませんまい。

私は最う、影法師が死神に見えた時でも、貴女に逢へば、元氣が出て、心が活々したんです。それだから貴女はつひぞ、ふさいだ、陰氣な、私の屈託顔を見た事はないんです。

ねえ。

先刻もいふ通り、私の死んで了つた方が阿母のために都合よく、人が世話をしようと思つたほどで、又それに違ひはなかつたんですもの。

實際私は、貴女のために生きて居たんだ。

而して、お民さん。」

あるじが落着いて靜にいふのを、お民は激しく聞くのであらう、潔白なる其の顔に、湧上る如き血汐の色。

「切迫詰つて、いざと首の座に押直る時には、たとひ場處が離れて居ても、屹と貴女の姿が來て、私を助けて呉れるツて事を、堅くね、心の底に、確に信仰して居たんだね。

まあ、お民さん許で夜更しして、ぢや、おやすみつてお宅を出る。遅い時は寢衣のなりで、寒いのも厭はないで、貴女が自分で送つて下さる。

門を出ると、あの曲角あたりまで、貴女、其の寢衣のままで、暗の中まで見送つて呉れたでせう。小兒が奥で泣いてる時でも、雨が降つて居る時でも、づつと背中まで外へ出して。

私は又、曲り角で、屹と、密と立停まつて、しばらく經つて、カタリと樞のおりるのを聞いたんです。

其の、歸り途に、濠端を通るんです。樞は下りて、貴女の寢た事は知りながら、今にも濠へ、飛込まうとして、此の片足が崖をはづれる、背後を確乎と引き留めて、何をすの、謹さん、と貴女が屹といふと確に思つた。

ですから、死なうと思ひ、助かりたい、と考へながら、そんな、厭な、恐あしい濠端を通つたのも、樞をおろして寢なすつた、貴女が必ず助けて呉れると、それを力にしたんです。お庇で生きて居たんですもの、恩人でなくツてさ、貴女は命の親なんですよ。」

と唯懷しげに嬉しさにいふ顔を、熟と見る／＼、ものをいはず、お民ははら／＼と、薄曇る燈の前に落涙した。

「お民さん、」

「謹さん、」

とばかり齒をカチリと、堰きあへぬ涙を噛み留めつゝ、
「口についていふやうでをかしいんですが、私も矢張。貴下は、もう、今ぢやこんなにおなりですから、私は要らなくなつたでせうが、私は今も、今だつて、其の時分から、何ですよ、同じなんです、謹さん。慾にも、我慢にも、厭で厭で、厭で／＼死にたくなる時がありますとね、然うすると、貴下が來て、お留めなさると思つてね、それを便りにして居ますよ。」

まあ、同じやうで不思議だから、これから別れて歸りましたら、私も又、月夜にお濠端を歩きませう。而して貴下、謹さんのお姿が、其處へ出るのを見ませうよ。」

と差俯向いた肩が震へた。

あるじは、思はず、火鉢なりに擦り寄つて、
「飛んだ事を、串戯ぢやありません、そ、そ、そんな事をいつて、讓(小兒)さんを何うします。」

「だつて、だつて、貴下が、其の年、其の思ひをして居るのに、私はあの兒を拵へました。そんな、そんな兒を構ふものか。」

とすねたやうに鋭くいつたが、露を漉へた花片を、湯氣やなぶると、笑を漉へ、

「ようござんすよ。私はお濠を樂みにしますから。でも、

こんなぢや、私の影ぢや、凄い死神なら可いけれど、大方
臆にでも見えるでせう。」

と投げたやうに、片身を疊に、棲も亂れて崩折れた。

あるじは、ひとと寄せて、押へるやうに、棄てた女の手を取つて、

「お民さん。」

「……………」

「國へ、國へ歸しやしないから。」

「あれ、お待ちなさい伯母さんが。」

「どうした、どうしたよ。」

といふ母の聲、下に聞えて、わつとばかり、其の讓といふ兒が。

「煩いねえ！一寸、見て來ますからね、謹さん。」

とはらりと立つて、脛白き、敷居際の立姿。やがてトン
トンと階下へ下りたが、泣き留まぬ讓を横抱きに、しばらくして品のいゝ、母親の優しい形で座に返つた。燈火の陰に胸の色、雪の如く清らかに、讓はちゆう／＼と乳を吸つて、片手で縋つて泣いじやくる。

あるじは、きちんと坐り直つて、

「どうしたの、酷く怯えたやうだつけ。」

「夢を見たかい、坊や、どうしたのだねえ。」

と頬に顔をかさねれば、乳を含みつゝ、愛らしい、大き

な目をくるくるとやつて、

「颯が、阿母さん。」

「えゝ、」

二人は顔を見合はせた。

あるじは、居寄つて顔を覗き、故らに打笑ひ、

「何、内へ颯なんぞ出るものか。坊や、鼠の音を聞いたんだらう。」

小兒はなほ含んだまゝ、いたいけに捻向いて、

「うゝむ、内ぢやないの。お濠ン許で、長い尻尾で、あの、目が光つて、私、私を睨んで、恐かつたの。」

と、くるりと向いて、ひつたり母親の其の柔かな胸に額を埋めた。

又顔を見合はせたが、今は其の色も變らなかつた。

「おゝ、然うかい、夢なんですよ。」

「恐かつたな、恐かつたな、坊や。」

「恐かつたね。」

からく／＼と格子が開いて、

「どうも、おそなはりました。」と勝手でいつて、女中が歸る

「さあ、御馳走だよ。」

と衝と立つたが、早急だつたのと、抱いた重量で、裳を前に、よろ／＼と、お民はよろけながら段階子。

「謹さん。」

「……………」

「翌朝のお米は？」

と艶麗に莞爾して、

「早く、奥さんを持つて下さいよ。あゝ、女中さん御苦勞でした。」

と下を向いて高く言つた。

其時襖の開く音がして、

「おそなはりました、御新造様。」

お民は答へず、ほと吐息。圓鬚艶やかに二三段、片頬を見せて差覗いて、

「此處は閉めないで行きますよ。」

(明治三十八年十一月)

春 晝

一

「お爺さん、お爺さん。」

「はあ、私わしけえ。」

と、一言で直ぐ應じたのも、四邊あたりが静かで他には誰も居なかつた所爲であらう。然うでないと、其の皺だらけな額に、顚くるまき卷を緩くしたのに、ほか／＼と春の日がさして、とろりと酔つたやうな顔色で、長閑かに鍼を使ふ様子がある又其の下の柔な土に、しつとりと汗ばみさうな、散りこぼれたら紅の夕陽の中に、ひら／＼と入つて行きさうな——暖い桃の花を、燃え立つばかり揺ぶつて頻に囀つて居る鳥の音こそ、何か話をするやうに聞かうけれども、人の聲を耳にして、それが自分を呼ぶのだとは、急に心付きさうもない、恍惚きうことした形であつた。

此方こつちも此方で、恁く立處に返答されると思つたら、聲を懸けるのぢやなかつたかも知れぬ。

何爲ななら、扱て更めて言ふことが些と取り留めのない次第なので。本来なら此の散策子が、其のぶら／＼歩行あるきの手すさびに、近頃買求めた安直な杖つえを、眞直に路に立てて、鎌倉の方へ倒れたら爺を呼ばう、逗子の方へ寝たら黙つて置かう、とそれでも事は済んだのである。

多分は聞えまい、聞えなければ、其まゝ通り過ぎる分。餘計な世話だけれども、黙切だまきりも些と氣になつた處。響の應ずるが如き其の、(はあ、私わしけえ)には、聊か不意を打たれた仕誼。

「あゝ、お爺さん。」

と低い四目垣へ一足寄ると、ゆつくりと腰をのして、背後へよいとこさと反るやうに伸びた。親仁との間は、隔てる草も別になかつた。三筋ばかり耕やされた土が、勢込んで、むく／＼と湧き立つやうな快活な香を籠めて、然も寂寞とあるのみで。勿論、根を抜かれた、肥料になる、青々と粉を吹いたそら豆の芽生に交つて、紫雲英もちらほら見えなければならぬ。

鳥打に手をかけて、

「つかんことを聞くがね、お爺さんは何ぢやないかい、此の、其處の角屋敷の内の人ぢやないかい。」

親仁おやねはのそりと向直つて、皺だらけの顔に一杯の日當り、桃の花に影がさした其の色に對して、打向ふ其方の屋根の

薨は、白晝青麥を烘る空に高い。

「あの家のかね。」

「其の二階のさ。」

「いんえ、違ひます。」

と、云ふことは素氣ないが、話を振切るつもりではなさうで、肩を一ツ揺りながら、鍬の柄を返して地について此方の顔を見た。

「然うかい、いや、お邪魔をしたね。」

これを機に、分れようとする、片手で顚巻を拂取つて、

「どうしまして、邪魔も何もござりましねえ。はい、お前様、何か尋ねごとさつしやるかね。彼處の家は表門さ閉つて居りませども、貸家ではねえが……」

其の手拭を、裾と一緒に、下からつまみ上げるやうに帶へ挟んで、指を腰の兩提げに突込んだ。これでは直ぐにも通れない。

「何ね、詰らん事さ。」

「はい……」

「お爺さんが彼家の人なら然う言つて行かうと思つて、別に貸家を捜してゐるわけではないのだよ。奥の方で少い婦人の聲がしたものの、空家でないのは分つてゐるが、」

「然うかね、女中衆も二人はッか居るだから、」

「其の女中衆に就いてさ。私がね、今彼處の横手を此の路へかゝつて來ると、溝の石垣處を、ずる／＼と這つてね、一匹居たのさ——長いのが。」

二

怪訝な眉を臆面なく目に這はせて、親仁、煙草入をふらふら。

「へい、」

「餘り好物な方ぢやないからね、實は、」

と言つて、笑ひながら、

「其の癖恐いもの見たさに立留まつて見て居ると、何ぢやないか、やがて半分ばかり垣根へ入つて、尾を水の中へぱたりと落して、鎌首を、あの羽目板へ入れたらうぢやないか。羽目の中は、見た處湯殿らしい。それとも臺所かも知れないが、何しろ、内にやういふ女たちの聲がするから、どんな事で吃驚しまいものでもない、と思ひます。」

あれッ切、座敷へなり、納戸へなりのたくり込めば、一も二もありやしない。それまでと云ふもんだけれど、何處か板の間にとぐろでも巻いて居る處へ、うつかり出會したら難儀だらう。

どの道餘計なことだけれど、お前さんを見かけたから、つい其處だし、彼處の内の人だつたら、一寸心づけて行か